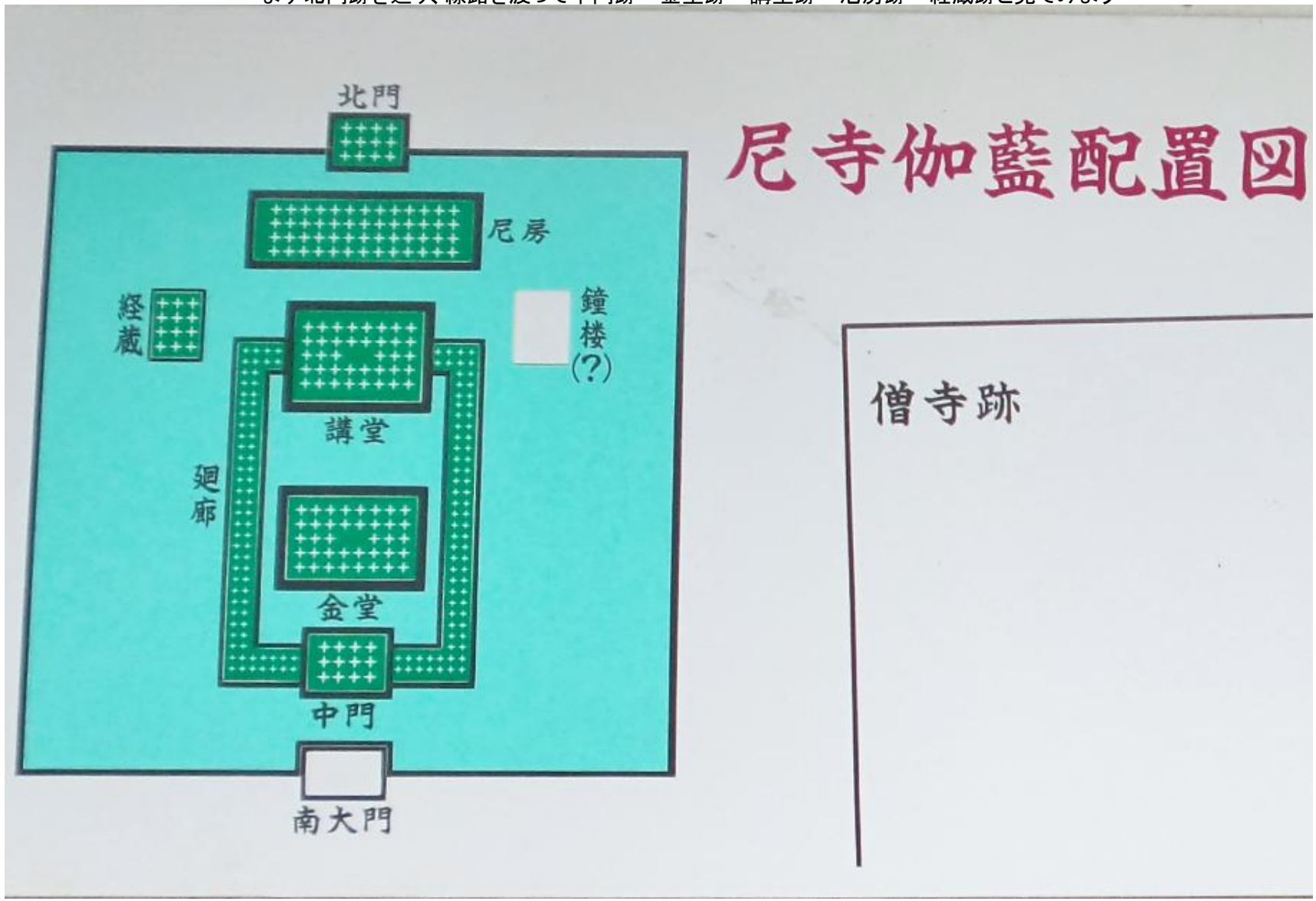
信濃国分尼寺跡（上田市）

国分尼寺も僧寺と同様に線路によって分断されてしまっている

まず北門跡を巡り、線路を渡って中門跡→金堂跡→講堂跡→尼房跡→経蔵跡と見てみよう



北門跡

線路をまたいで、まっすぐな軸線上に手前から尼房跡、講堂跡、金堂跡、中門跡と続く

史跡信濃国分寺跡
尼寺北門跡
基壇規模は東西13m×南北9mで、建物は
正面10.2m、側面6.4mと想定される。なお、

それぞれの礎石の跡が見てとれる

さて、線路を渡って中門近くから見てみよう/正面に説明版がある

史跡信濃国分寺跡　尼寺跡

ここは、古代信濃国分寺の尼寺回廊南西隅にあたります。

天平１３年（741）聖武天皇により国分寺建立（建設）の詔（命令）が下され、僧寺（金光明四天王護国之寺）、尼寺（法華滅罪之寺）の建立が全国に命じられました。僧寺には僧侶二十人、尼寺には尼十人がおかれ、僧や尼は毎月８日に最勝王経を転読することなど、定められた規則に従って生活することが義務づけられていました。

ところが、各地の国分寺造営（建設事業）は期待したようにはかどらなかったようで、天平１９年（747）には国分寺の造営を督励（補促）する詔が発されています。

天平勝宝４年（752）に総国分寺である東大寺の大仏開眼供養が執り行われ、総国分尼寺の法華寺も建立されました。しかし、天平宝字３年（759）になっても国分寺造営を督促する記事が「続日本紀」にみられ、西暦770年前後に至ってようやく大半の国で国分寺が完成したと考えられています。

信濃国分寺跡では、昭和３８年から４６年に至る数次にわたる史跡整備と、これに伴う発掘調査が並行して行われ、僧寺・尼寺の伽藍の全容と、これに伴う多くの資料を検出することができました。

この尼寺跡では、北から北門・尼房・講堂・金堂・中門が直線上に並び、講堂と中門が回廊で結ばれ、講堂の西には経蔵も確認されました。ただ、南大門と尼寺全体を取り囲む８０間（約148m）四方と推定される築地塀の南辺と西辺はまだ確認されてないことや、建物の詳細については解明されていないことも多く、これからの調査や研究が必要とされています。

平成２２年３月１日

上田市教育委員会

尼寺空撮（写真上が北）

昭和41年(1966)
尼寺金堂南部跡発掘調査

史跡信濃国分寺跡　尼寺跡

ここは、古代信濃国分寺の尼寺回廊南西隅にあたります。

天平１３年（741）　聖武天皇により国分寺建立（建設）の 詔（命令）が下され、僧寺（金光明四天王護国之寺）、尼寺（法華滅罪之寺）の建立が全国に命じられました。僧寺には僧侶二十人、尼寺には尼十人がおかれ、僧や尼は毎月８日に最勝王経を転読することなど、定められた規則に従って生活することが義務づけられていました。

ところが、各地の国分寺造営（建設事業）は期待したようにはかどらなかったようで、天平１９年（747）には国分寺の造営を 督励（催促）する詔が発されています。

天平勝宝４年（752）に総国分寺である東大寺の大仏開眼供養が執り行われ、総国分尼寺の法華寺も建立されました。しかし、天平宝字３年（759）になっても国分寺造営を督促する記事が「 続日本紀」にみられ、

西暦770年前後に至ってようやく大半の国で国分寺が完成したと考えられています。

信濃国分寺跡では、昭和３８年から４６年に至る数次にわたる史跡整備と、これに伴う発掘調査が並行して行われ、僧寺・尼寺の伽藍（がらん）の全容と、これに伴う多くの資料を検出することができました。

この尼寺跡では、北から北門・尼房（にぼう）・講堂・金堂（こんどう）・中門が直線上に並び、講堂と中門が回廊で結ばれ、講堂の西には経蔵（きょうぞう）も確認されました。ただ、南大門（なんだいもん）と尼寺全体を取り囲む８０間（約148m）四方と推定される築地塀（ついじべい）の南辺と西辺はまだ確認されてないことや、建物の詳細については解明されていないことも多く、これからの調査や研究が必要とされています。

平成２２年３月１日

右手が中門跡、左手が尼房跡

遠方に線路が横切っており、その向こうには先程の北門跡がある

中門跡左側面に回廊跡が廻り込む

右手は中門跡（手前は回廊跡）、左手は金堂跡

史跡信濃国分寺跡
尼寺中門跡
根固めの栗石などが発見された。基壇規模は東西19.5m×南北13.0mほどが想定され、建物は正面11.8m、側面6.4m、3×2間の四脚門と考えられる。

中門跡

中門跡/礎石の位置が示されている

正面は中門跡

金堂跡、その向こうが講堂跡

史跡信濃国分寺跡
尼寺金堂跡
礎石の栗石地業が10ヶ所で検出されたほか、
基壇の南・東・西の三方で石組の雨落溝が良好
に検出された。特に基壇東縁の一部では立った
状態の羽目石が出土して注目された。基壇は東
西29.7m×南北約19.5m、建物は正面22.4m、
側面12.4mの7×4間と推定される。

手前は金堂跡、その右手遠方に講堂跡

左手前は金堂跡

左手は金堂跡右側面、右手は講堂跡

金堂跡、奥が中門跡

金堂跡左側面

講堂跡

史跡信濃国分寺跡
尼寺講堂跡
根固めの栗石群から明らかになった規模は、
基壇が東西31.0m×南北21.6mで、建物は正面
22.0m、側面12.4mの7×4間と推定される。

講堂跡から左側面（向こう側）に回廊跡が延びる

講堂跡

講堂跡から左側面（手前）に回廊跡が延びる

正面は講堂跡（手前）から中門方向（向こう）へ延びる回廊跡

左側回廊から金堂方向を見る

尼房跡

尼房跡（手前）から中門方向を見る

尼房跡左側面

遠景から尼房跡を見る

尼房跡付近から中門方向を見る

その右手に経蔵跡がある

史跡信濃国分寺跡
尼寺経蔵跡
大きさは南北10.8m×東西6mで、3×2間と判明した。この建物跡を経蔵とする直接の資料の発見はなかったが、建物の位置と規模から経蔵と想定される。

右手の回廊跡からその更に右手に説明版が見える

犬の糞は
お持ち帰りください
史跡公園

鐘楼跡・南大門跡がまだ見つかっていないとのこと

尼　寺　跡　案　内

国分尼寺（法華滅罪之寺）跡は、僧寺（金光明四天王護国之寺）跡の西方40ｍと寺域がきわめて近接していることが、昭和41年(1966)からの 発掘調査でわかりました。この尼寺跡は、古文書に「二寺の堂」「にぢのだう」などの地字が残されているところでした。

尼寺跡では、中門・金堂・講堂・回廊・経蔵・鐘楼・尼房・北門の遺構が明らかにされ、南大門の位置も推定されました。80間(約148ｍ)四方の寺域のなかに、南大門・中門・ 金堂・講堂・尼房・北門が南北一直線にならんでいます。中門と講 堂は回廊（単廊）でつながり、講堂の東に鐘楼・西に経蔵があります。このような伽藍配置を東大寺（国分寺）式といいます。

金堂は今の寺院の本堂にあたり、釈迦牟尼仏が安置さ

れ、講堂は 法を説き経を講ずる場所でした。経蔵は経典を納めたところで、鐘楼は梵鐘をかけた建物です。尼房は尼僧が生活する宿舎でした。

発掘調査では、古瓦をはじめ、須恵器・土師器など多くの遺物が出土しました。八葉複弁蓮花文鐙瓦や 均正唐草文宇瓦とともに、　日本ではじめて造られた銅銭「和同開珎」も発見されました。これらはすべて 信濃国分寺資料館に収蔵し、展示されています。

遺構は埋め戻しによる基壇復元方式がとられています。建物跡の表面をアスファルトで覆い、芝生や 玉砂利で区画し、築地跡には、ドウダンツツジを植え、寺域がよくわかるようになっています。

左手に金堂跡、右手に講堂跡を見る

史跡
信濃国分尼寺
法華滅罪之寺跡

「回廊跡」の表示

遠景から見る

参考ホームページ

http://museum.umic.ueda.nagano.jp/kokubunji/park.htm

http://museum.umic.jp/map/document/dot56.html

http://mapbinder.com/Map/Japan/Nagano/UedaShi/Kokubunji/Kokubunji.html

インターネットより